

身近に眠る未知の古墳

—松尾山古墳群・鳴滝藤ノ木町古墳—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 古墳とは、今から約1,700～1,400年前を中心とした時期に造られたお墓です。これまでに全国で約16万基を超える古墳が確認されており、その規模や形態はバリエーションに富んでいます。

京都府下では現在までに約13,000基の古墳が知られており、京都市域には800基ほどの古墳が所在しています。そのうち約250基が旧京北町域に存在しており、それを除いた約550基が京都盆地・山科盆地に分布しています。

これらの古墳の分布は「西高東低」で、文字通り盆地の西側に大多数が集まっています。特に桂川左岸の太秦・嵯峨野、右岸の乙訓と呼ばれた地域には多数の古墳が

所在し、全国的にも著名です。

既に消滅してしまったものもありますが、今でも住宅街や山林の中に多くの古墳が残っています。古墳は、基本的に土を盛り上げて造られており、比較的目立つ構造物です。しかし、現在までに知られているものだけが全てではなく、年々新たな古墳が見つかっています。ここでは京都市内で近年見つかった2基の古墳について紹介したいと思います(図1)。

松尾山古墳群 松尾大社の背後にそびえる標高223mの松尾山では、これまでに多くの古墳が確認されています。これらの古墳は立地や分布から松尾山古墳群・西芳寺古墳群・西芳寺川古墳群などに分けられます。

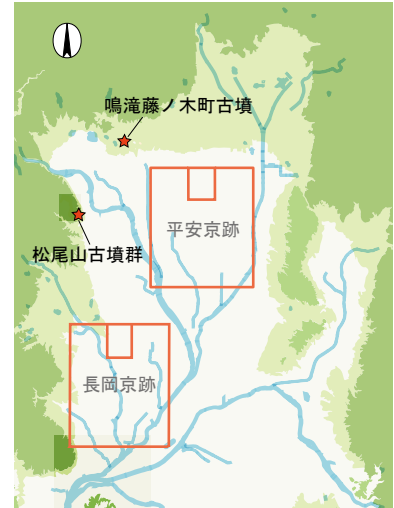


図1 古墳の位置

平成30年に松尾山古墳群の南方に所在する山田桜谷古墳群の調査の際、その周辺もあわせて航空レーザー測量を行いました(図2)。これは赤色立体図と呼ばれ、樹木を透過して地形を図化できるので、通常の測量では地形の把握が困難

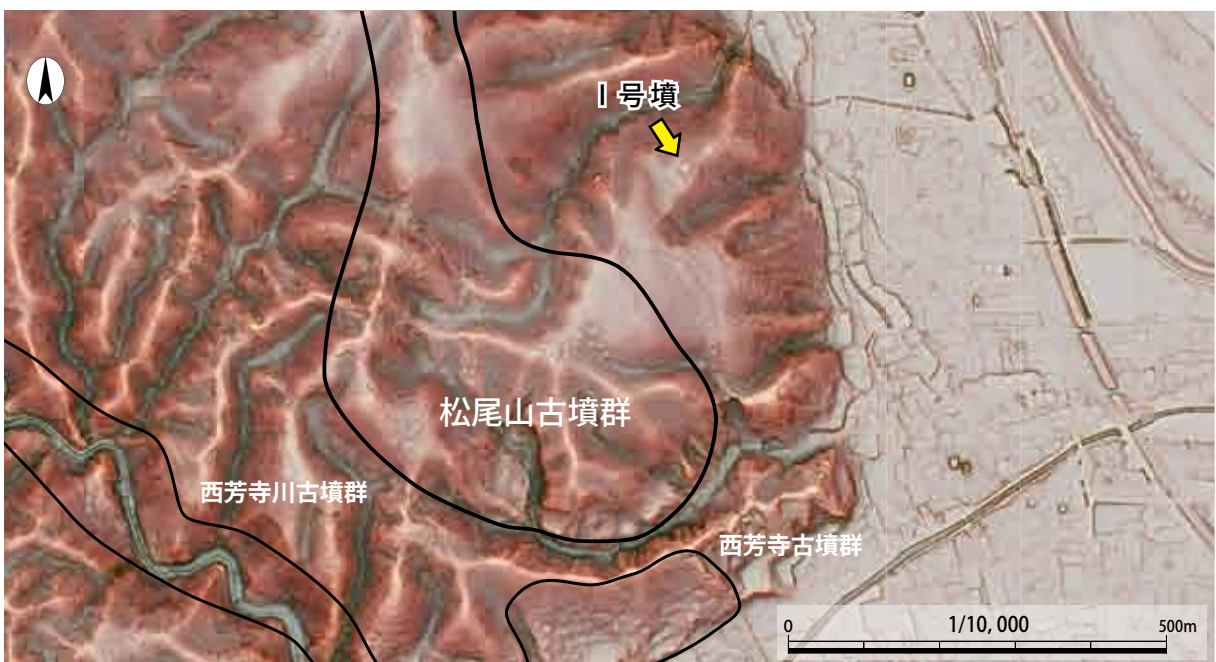


図2 松尾山古墳群1号墳の位置



写真1 松尾山古墳群 I号墳(南西から)

な場合に非常に有効な手段です。図では、傾斜が急な面が赤く、尾根は明るく、谷は暗くなるように表現されています。古墳は小山のような形で図に表れます。

この測量図をもとに、現地踏査を行ないました。その結果、これまで知られていなかった新たな古墳を1基確認することができました(写真1)。仮にここではI号墳と呼称します。

I号墳は、松尾山から東に向かって分岐した細長い尾根の頂部に立地し、松尾山古墳群の中では最も東端に位置します。まだ、詳細な墳丘測量図がないため、不明な点も多いですが、墳丘長が21m、高さが1.9mほどの、円墳もしくは方墳と考えられます。古墳の西側では、古墳を造る際に部分的に切土して、地形を改変した痕跡が確認できます。遺物などを採集できていないため、時期は不明ですが、周辺の古墳が古墳時代後期のものであることから、I号墳も同時期の古墳とも考えられます。

現在、古墳の周辺は樹木に覆わ

れており、周りを見渡すことはできませんが、古墳が造られた当初は東側に眺望が開けていたのでしょう。どのような人がここに葬られたのでしょうか。

鳴滝藤ノ木町古墳 平成26年に存在が明らかとなった古墳です。所在する地名から鳴滝藤ノ木町古墳と名付けられました。現状、所在地は平坦で古墳の存在を示す痕跡は見当たりません。

今から30～40年前に住宅を建築した際に須恵器2個体が出土し、平成26年にそれが京都市に寄託されました(図3)。出土した須恵器を調べると、古墳時代後期のものであることが判明しました。出土

地点はこれまで遺跡の存在が知られていない場所であったことから、現地確認および聞き取り調査を実施しました。すると、これらの須恵器は現在、庭石として使用している大きな石材と共に出土した事が明らかとなりました。詳細は不明ですが、遺物の時期や出土状況から、この須恵器は古墳の副葬品である可能性が高く、また周辺の遺跡の状況を踏まえると、横穴式石室を埋葬施設とする古墳と考えられます。周辺には更に同様の古墳が眠っている可能性もあり、注目されます。

まとめ 新規発見の古墳は、毎年全国で見つかり、市内では他にも西京区の堂ノ上古墳などがあります。これらの古墳は見つかりにくい場所に造られたものもありますが、自然災害等で埋没してしまったり、後世に土地利用のなかで削られてしまったり、平安京や伏見城などの造営にともなう土木工事によって改変を受けたものなどがあります。

もしかすると、皆さんの身の周りにもまだまだ未発見の古墳が眠っているかもしれません。

(京都市文化財保護課 熊井亮介)

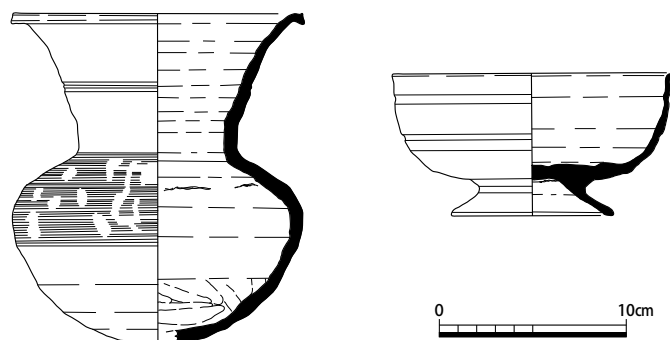


図3 鳴滝藤ノ木町古墳より出土した須恵器